世界の文学

20

ノサック

集英社版 世界の文学 20 ノサック

弟

ルキウス・エウリヌスの遺書

待機

集英社

DER JÜNGERE BRUDER
by Hans Erich Nossack
Copyright © 1958 by Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main
DAS TESTAMENT DES LUCIUS EURINUS
by Hans Erich Nossack
Copyright © 1965 by Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main
BEREITSCHAFTSDIENST
Copyright © 1973 by Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main
Japanese translation rights arranged through Orion Press.

© 1977 Shueisha

集英社版世界の文学20
ノサック
一九七七年一月二〇日印刷
一九七七年二月二〇日発行
訳者　中野孝次／圓子修平／小栗浩
編集　株式会社綜合社
一〇一　東京都千代田区神田神保町三―六―五
電話（〇三）二三九―三八一一
発行者　堀内末男
発行所　株式会社集英社
一〇一　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　出版部（〇三）二三〇―六三六一
販売部（〇三）二三〇―六一七一
印刷所　中央精版印刷株式会社
大日本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
定価は帯に表示されています
0397-122020-3041

目次

弟　中野孝次訳　3
ルキウス・エウリヌスの遺書　圓子修平訳　269
待機　小栗浩訳　319
解説　中野孝次　403
著作年表　414

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

弟

1　到　着

こうでもしないとわたしのおかれている状況を理解してもらえないので、事態を明らかにするために、まずハンブルク到着のさいの、それ自体はなんの変哲もない出来事から描いてみることにする。ともかく、こういったことはすべて、一九四九年の初め、つまり当地にまだ生き残っていた人びとが餓死からのがれようと決意してから、まだ何カ月もたっていないころ起ったことだ。

汽船はゆっくり桟橋に近づいていった。下に義父母たちの立っているのが見え、義父のほうでもようやくわたしを見つけだしたらしかった。彼は船橋にむかって黒いホンブルク帽をふってみせ、その隣のご婦人、ペルシア小羊の外套を着た小柄のむっちりした女性もハンカチをふっていた。わたしも同じ身振りで答えて、さらに念のため微笑してみせた、距離があったからまだそんな必要はなかったかもしれないが。

朝も早く、それに船というのが古い貨物船だったものだから、桟橋に立っているひとの数は多くはなかった。どうやら前の晩に雨が降ったらしく、ひどく傷んだ舗道のいたるところに水溜りが光っていた。桟橋の荷揚げ場もずいぶん破損していて、コンクリートの岸壁がところどころ水の中に崩れ落ちていた。町への眺めは、一つだけ立っている埠頭倉庫と、そのむこうの倉庫の壮大な廃墟によってさえぎられていた。埠頭倉庫のほうは、赤煉瓦といい、骨組み、それに錆びた鉄板で作られた引き戸といい、いかにも仮のものという感じであった。その右手にはスクラップの荷揚げ場があるらしく、さかさになった軌道式クレーンや、古いボイラーの円蓋、マンホール、その他のがらくたが、一時しのぎに有刺鉄線で囲われているのが見えた。そしてそんなものすべての上に、すでにところどころ草が生えていた。

接岸しつつある汽船がすさまじい騒音を立てているさなかに、とつぜん教会の塔時計のなりひびくのが聞こえてきた。どこに教会なんかがあるんだろう？　とわたしはびっくりして自問した。音のする方に目を向けると、例の倉庫の左手、いまはもう使われていないレールのわきの草地に、無数の緑青色の教会の鐘が、大小とりまぜて並んでいるのが見えた。それはまるで植木畑か、あるいは、もっと巧くいえば、なにか異国ふうの墓地のようだった。どこかの人

びとが、死者たちを鐘の下に葬るという風習を採用したかのようだった、おとなは大きな鐘の下に、子供は小さい鐘の下に。そしてとくに大きな鐘の下にはおそらく有名な人か、あるいは一家族ぜんぶが横たわっているのだ。鐘と鐘のあいだにはしかし、青い服をきた労働者が動いていて、遊んでいるか、音色でもためしているみたいに、鉄の棒で鐘を叩きまわっていた。

夢を見てるんじゃなかろうか、とわたしは大まじめで自問してみた。それほどこの光景と出来事は奇妙にわたしを感動させたのだ。だれかがそうブラジルまで知らせてよこしたか、あるいは新聞でそう読んだかしたので、わたしはすっかりハンブルクの大部分は破壊されたとばかり思いこんでいた。だのに、わたしへの挨拶のために鳴っているかのような、この鐘はどういうことなのだろう？　そのうえ下の桟橋には義父母が、仮にこの町が破壊されなかったとしてもやはりそう立っていたと思われるように、正確にそんなふうに立っている。つまりそんなことにもわたしは妙な気持にさせられたのだ。もっとも、ではあのとき自分はいったいどんな態度をかれらに期待していたのかというと、それはいまはもうとても伝えることができそうにないけれども。

いまわたしは思う、あの瞬間わたしは、ヨーロッパに帰らねばならぬ理由が自分にもよくわかっていないことを、苦痛なほど明瞭に意識したのだ、そして、物事を自然の成りゆきにまかせるのはわたしの習慣ではなかったから、この無考えな旅行のことで自分自身を憎んだのだ、と。しかしもう遅すぎた。わたしはみなが期待しているとおりにふるまうよう努めねばならなかった。これはけっして容易なことではなかったけれども。ほぼ十年、それもほとんどもっぱら未開地域ですごした十年ののちに、かつて自ら進んで去り、そのあいだにわたしの承認なしに勝手に滅亡してしまった、しかもそれをいままたみんなで再建しようとしているらしい国に、過去に、わたしはもどってきた。というこのことが、あるいは、船の上で感じた不安を説明しているかもしれない。つまりわたしは、記憶のなか以外にはもはや存在しているはずのない大陸にいま自分が近づきつつあるかのような、そんな感じをもったのだ。そこへもってきてあの奇妙な鐘の音である。

もっとも二、三時間後にはそんな感じはすっかり変っていた。というのは、そのあいだにわたしは《スザンヌ事件》に関する警察の調書、いつも義父が自分の書類をしまっておく小さな金庫のなかにきちんと整理されてあった調書を、くまなく読んだのだ。スザンヌとはわたしの妻、わたしの不在のあいだに命を失った女である。そしてこれら

の調書によって初めてわたしは自分の帰郷の動機を納得することができた。

いつのまにかタラップがおろされていて、出迎え客たちがあがってきだした。義父は彼の妻がハイヒールでつまずいたりしないように、そっと彼女の腕を支えていた。上の平らな場所までくると、彼女を先に立てて歩かせた。わたしは彼女の方に歩みよって、抱擁をうけた。「ああ、気の毒なシュテファン」と彼女はいった、そして涙さえわたしの頬に感じられた。そこでわたしも、そうしたほうがふさわしいように思われたので、腕を彼女のからだにまわした。彼女の毛皮は高価な香水の匂いがした。

彼女から放免されると、こんどは義父がわたしの方に歩みよってきて、すぐ両手をさしだした。「やあ、お帰り！」と彼があまり大きな声で堂々と叫んだものだから、ぼんやりタラップにつっ立っていたブラジルの高級船員がびくっとしてからだを硬ばらせたほどだった。まさしくそれは社長の声だった。

この握手も無事切り抜けると、義父はかたわらに身をひいて、ひとりの色艶のわるい女性と、その隣でこれらの光景を幼い動物のような注意ぶかい目で観察している、九つか十くらいの少年にわたしをひきあわせた。

しまった、という思いがわたしの心を貫いた、いまだけはヘマをするわけにいかないぞ！　この子はなんという名前だったっけ？　なにか短い名前だったな、クルト、それともフリッツ。いや、そんなんじゃない。なにしろ手紙にわざわざ書いてよこしたんだからな。どうして忘れたりできたんだろう？　さっきのあのおかしな鐘の音のせいか？

しかしいあんばいにそのとき、「さあ、ゲルト、お父さまにご挨拶は？」と色艶のわるい女がいった。そうか、ゲルトか！　愛想よく抱きあげてやるには少年が大きくなりすぎていたから、わたしはかがみこんで、彼の額にキスをしてやった。そして彼の肩を叩いて、いった、「ようやっときみにあえてうれしいよ、ドン・ゲラルド！」それから、ふたたびからだをおこしてみると、義母がわたしたちの方をホロッとしたようすで見ていたので、彼女にもいった、「ほんとにスザンヌそっくりですね。」

「ええ、そうでしょ」と彼女は答えた、「みなさんそうおっしゃるのよ。――ところで、こちらがヴィーゼナー夫人、長いあいだずっとゲルトのめんどうをみてくださっている方です」とわたしをその女に紹介した。わたしはヴィーゼナー夫人にも手をさしだした。そして、どうやらこれでみんなが期待していたとおりにふるまえたらしいぞ、と考えた。

「お部屋に飾ってあるお写真で、パパがすぐわかったでし

ょう?」と、ヴィーゼナー夫人が少年にきくと、少年はよく躾られているらしく頭をこっくりさせた。
「ここにはきっとこの子の見たいものがたくさんあると思います」とわたしは話題を転じた。「だからどうですか」とわたしは義父母たちにむかっていった、「わたしたちはバーにいって、挨拶がわりに一杯やることにしたら。あそこには、ベラ・クバーナかなにか、いい葉巻もありますし。そうすれば、そのあいだにドン・ゲラルドは甲板を見物してまわれて、彼にもそのほうがおもしろいでしょう。」
三人でバーに腰をおろして、給仕が飲物を運んできたとき、わたしの最初の質問は——といってもそんな質問をしたのは、むしろ間の悪さをとりつくろおうとしてだったが——
「あの鐘はどういうことなんですか?」
「どの鐘のことかね?」
「そとのあの桟橋のですよ。」
「ああ、あれか」と義父はいった。「あれは戦争の残骸だよ。あのころほうぼうの教会からひきずりおろしてきたものさ。この国や、ほかのいろんな国から。知ってのとおり、われわれは金属を必要としておったんでね。あそこにあるのは利用されるまでにいたらなかった分でな、いまあれを教会に返そうとしているんだ。しかし、それがそう簡単には確認できんのだ、人間が死んでおったり、書類がなくなっておったりでな。まあ、まだ長いことかかるだろう。」
「それじゃ、また教会を建てようとしてるんですか?」とわたしはきいた。
「そうさ、もちろん。それにだいたい、教会という教会がぜんぶやられたわけではない。きみも知ってのとおり、なにしろ教会はニヒリズムにたいする重しだからな。」
「ええ、わかります」とわたしは、いっこうにわからなかったけれどもそういって、同時にそのことばで、ロシア大公や警察長官に爆弾をなげつけた人びとのことを思いださざるをえなかった。で、わたしはきき返した。
「でもニヒリズムとはまたどうして?」
「よくそういうじゃないか」と義父は説明した。「戦争やこのゴタゴタからでてきたものを。つまり無法状態をだな。ひところはなんでも許されていた、だれもが自分でなんとか切り抜けるほかなかったからな。しかし、若い連中をこんな気風からひきもどすのはたいへんなことだぞ。かれらには突っかえ棒が必要なんだ。まあ、こんなことはいずれきみも自分の目で見てわかるだろうが。」
昔の習慣どおり、わたしは義父がしているネクタイの小さな水玉模様に目をむけていた。このネクタイもあの破局をくぐり抜けてきたのだろうか? それともほんとうにま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

たこんなものが買えるようになったのか？
「きっと初めのうちはなにもかも慣れないことばかりでまごつくだろうと思います」とわたしはいった。「なにしろあちらの新聞ではドイツのことはわずかしか知ることができないもんですから。」
「お互いにできるだけのことはするさ。アメリーだってミッションの仕事を手伝っているんだ。」
「ヴィーゼナー夫人は東部からの逃亡者なのよ」と義母は話した。「それであの当時わたしたちがすぐうちに引きとったの。あの人は家族をぜんぶなくしてしまってね、あの人のご主人は彼女の目の前で殺されたんですよ。あの人がどんなに心からゲルトのことを思ってくれてるか、とてもあなたには想像がつかないでしょう。」
「ええ。あなた方はここでほんとうにひどい目にあわれたんですねえ」とわたしは、むこうがわにすわっている、身なりも、栄養も申しぶんなさそうなふたりにむかっていった。
「まあまあ」と義父は軽くうけながした。「永遠にうしろ向きの姿勢でいるわけにはゆかんよ、それではどうにもなりはせん。われわれはいまはまた秩序をつくりなおし、万事を再建しなくてはならんのだ。むしろそれには時間がいるがな。ところできみのぐあいはどうかね？　もうなにか計画を立てたかな？」
「でも、ハインツ！」と彼の妻は叫んだ。「会ったばかりなのに、もう計画のことなんか話しあわなくちゃなりませんの？」
「きまった計画はむろんまだもっていません」とわたしは義母にむかっていった。「たぶん初めのうちはすこしばかりようすを見なくちゃならないだろうと思います。」
「そう、そのとおりだとも」と義父はわたしに賛意を表した。「ゆっくりやるがいい！　きみはそうするだけの資格があるよ。」
　わたしは彼に、目下のところ自分としては二、三枚の書類を手わたせば気がすむので、それもただそれを手放してしまいたいからそうするだけのことで、けっしてその書類が緊急のものだからではない、と説明した。つまりそこにはわたしがあちらで行った二、三の考察と観察が記されているだけなのだと。「ぼくは船に乗ってからこの手記を書きだしたんですが、そうしてよかったと思っています、というのはむこうで書いたらすぐだれか別の人の手にわたってしまったかもしれませんからね。」
　わたしはこの目的のためにわざと古い貨物船での退屈な旅を選んだのだ、飛行機を使えばむろんもっと早くくることができたのだけれども。「ともかくぼくとしては、なに

も事を急ぐ理由はなかったんです。十年以上もあちらに行っていると、二、三週間多いかすくないかなんて問題にならないんですよ。いってみればこれは漸減療法を受けてるようなものでしてね。いきなり習慣を変えたりするのは、危険なことかもしれませんから。」

義父母たちは緊張して、しかしどうしようもないといったようすで、話を聞いていた。どうしてあんなことをいってしまったんだ、とわたしは考えた、ばかなことをしたかな？　いったいどんな習慣をやめるというんだ？　それにまたなにが危険なことだというんだ？　すくなくとも、あれを冗談ととってもらうために、微笑ぐらいうかべなくちゃいけなかったかな？

「要するに」とわたしは話しつづけた、「こっちへ帰ってからでは手記を書く暇がみつからないんじゃないかと心配だったんです。なにしろ当地の事情をまったく知りませんでしたから。」これはまたぞろ少々しゃべりすぎたぞ、とわたしは考えた。「あなた方が、というのはつまり会社が、この観察をもとになにかを始めることができるかどうかということになると、それはもう完全にぼくの判断のかぎりじゃありません。だいたいあなた方の国際的組織がいまどうなっているのか、戦争中のように断絶したままなのか、それともすでにふたたび連絡がついているのか、なにも知らないんですからね。いずれにしろぼくとしては、自分の体験や観察を海外支店の人たちや代理店にはしゃべらないほうがいいだろうと考えたんです。さきほどいったとおり、そういうことはぼくの仕事じゃありません、決定と評価はあなた方にまかせられているわけです。で、できればいますぐ事務所までいって、書類をおわたししたいのですが。お読みになったうえで、金庫の中なりなんなりつっこんでください。」

「だが、そう急ぐことではないんだろう」と義父は、わたしが話しているあいだは非常に興味ぶかそうに聞いていたのに、そう抗議した。

「もちろんです、書類そのものはすこしも急を要するものではありません」とわたしは同意した。「今日読んでも、五年後に読んでも、あまり変りがないようなものですよ。だいたいが非常に長い観点から見た問題を扱ってるものですから。だから急ぐのはもっぱら個人的な理由からです。実はもうこれ以上この書類をひきずっていたくないんです。ぼくにはいささか責任が重すぎるんで。」

「だってあなた、わたしたちといっしょに住んでくれるんでしょ？」と義母が口をはさんだ。「あなたのお部屋だって用意してあるし、それにもうみんなで非常に楽しみにしてるんですよ。」

「ええ、どうもありがとう、ママ」とわたしはいった、「ぼくだってきっとそうはからってくださると思っていました、でも、どうか気を悪くなさらないでください、仮にぼくが……いや、わけを説明させてください。ぼくはもうあまりにも長いこと家庭的な雰囲気のなかで暮したことがないんです、なかんずく文明化された家で暮したことは一度もなかった、たいていはバラックだとかテントだとか、そんな行きあたりばったりのところでしてね。しかし自分が礼儀正しくふるまえるかどうか心配してるわけでもない、そうじゃないんです、でもなんらかの形でぼくはきっとあなた方の快適さ、あなた方の習慣を乱すにちがいありません。それもただぼくがそこにいるというだけのことで。いや、いや、ママ、どうかぼくのいうことを信じてください、実際にそうなんです。そして、ぼくはきっとそうなると信じてますが、仮にあなたが非常に寛大で、そんなことをがまんなさるとしても、そうなったらこんどはぼくがたえず自分にむかって、おまえはこの家の人間じゃないんだぞ、と言いきかせなくちゃならないことになって、しょっちゅう気持を乱していることになるでしょう。でも、二、三カ月もしたらあるいはこんなこともすっかり変っているかもしれないし、そうしたら必ずおっしゃるとおりにさせてもらいます。しかしいまはお願いします、当分のあいだはどこかのホテルか下宿屋にでも住まわしてください、質素で目立たなければ、そのほうがますます好ましいんですが。いうまでもなく、当地にはたしてホテルなんかあるのかどうかも、ぼくはまだ知らないんですけど。」

「むろんあるさ」と義父は、問いたげに横目で妻を見ながら請けあった。「部屋は非常に粗末だがね、ホテルは確かにある。それにわが社用にむろんいつでも幾室か空けてあるはずだ。そういうことはシュトリングに手配してもらいなさい。きみはまだシュトリングを覚えているかね？　そうか、彼はずっと後になってわが社に入ったんだったな。たしかあれは一九四一年だったか。あのころわたしが軍隊にかけあって彼をまわしてもらったんだ。ドクトル・シュトリング、そう、非常に有能な男でな。いわばわたしの右腕だ。」

「それからもうひとつ、ママ」とわたしはいった。「あなた方はさきほどぼくに計画をもってるかどうかとおたずねになりましたが。ぼくが同じことをおききしても、どうか無作法だなんて思わないでください。」

「計画を？　わたしたちが？」と義母はきき返した。「どんな計画のこと？」

「つまりゲルトの問題です。ぼくの考えでは、いますぐそれを話しあっておいたほうがいいと思うんですが。」

「ああそのこと、もちろんよ」と彼女はいらだたしげにいった。「でもわたしたちがどんな計画にしろ立てられるわけがないでしょ？　あなたはここにいなかったんだし……」
「きみにきかずには」と義父が彼女に助けをだした、「むろんわれわれはあの子のことでいかなる決定もくだしたことがないよ。それにあれはまだ小さすぎるからね。」
「でも、だからこそ」とわたしは自分の関心事に固執した、「いまもう態度をきめておいたほうがいいと思うんです、あとになってからじゃそれが彼の成長を妨げることになりかねませんから。ええ、あなた方のご不興を買う危険をおかしても、このさいはっきりお願いしておきたいんです、今後ともゲルトはずっとあなた方の家で、あなた方のご指導のもとに育ててくださいませんか。スザンヌも生きていたらきっとこんなふうな処置を考えただろうと思うんです。それから費用のことについては、……」
「それはいう必要がない」とふたりは異口同音に叫んだ、「わたしたちがべつに不自由してないことは、あなただってよく知ってるでしょう。」
「そのことでどんなに感謝しているか、わかっていただけないんですね、ママ」とわたしはいった。「あなたはぼくから非常に大きな心配をとり除いてくださったんですよ。」

そして、この状況では、いま立ちあがって彼女の頬にキスをすることが必要なのではないかと考えたが、義父母たちはふたりとも非常に幸福そうな顔をしていたので、そうする必要はなくなった。
こういったことすべては、読者には語る必要もないことと思われるかもしれない。わたしもいまになってみると、あまりにも些細な事柄や会話ばかり書いてしまったような気がしている。しかしあのとき、到着した直後のころには、こういったことすべてが、いまではとても再現できないくらいの力で、わたしを緊張させていたのだ。わたしはぐらぐらする非現実的な地面の上を動いているようなものだったから、見とおしのきかない、どうしようもない状態に陥ちこむまいと思ったら、本能的に、夢遊病者のように受動的にふるまうしかなかったのだ。これはわたしにはほんとうにひどくなじめない状態だった。
埠頭倉庫のうしろに、大きな黒い乗用車がわたしたちを待っていた。近づくと、運転手がとびだしてきて、ドアをあけてくれた。わたしは義母とヴィーゼナー夫人とゲルトといっしょにうしろの席にすわらされ、義父は運転手の隣に席を占めた。また雨が降りだしていた。車は港の斜面の悪い道をゆっくり走った。汚水が泥よけにはねかかって音をたてた。

黙っていると気詰りなので、わたしはヴィーゼナー夫人にむかっていった。「ゲルトの世話をしてくださってるそうで、ほんとうに心からお礼申しあげます。」

色艶のわるい女の顔が、喜びのあまりいくらか赤くなった。「いいえわたくしのほうこそ彼のお蔭でどんなに助かっているかしれません」と彼女は吃りながらいった。

「ところでおからだのぐあいはどう？」と義母がきいた。

「熱病のあとなんにもお変りはなくって？」

「ああ、あれはもう何年も昔のことですよ。いや、ぼくはずっとじょうぶに暮してきました。」

「あなたはほんとにほとんど変っていませんね」と彼女は感想をのべたが、この威厳のある女性の口からでると、それはまるで非難のように聞こえた。いったい彼女は、十年の外国生活ののちわたしが破滅した男として、おとなしくなって帰ってくるとでも期待していたのだろうか？　わたしはひとりでにまた、むかし義父母たちにたいして使っていたと同じ口調にもどっていた。ていねいで、正確で、しかしおそらくいくらか無愛想な。ひょっとしたらこの態度が、ふだんは非常にひとのいい、けっしてインテリでないわたしの義母には、うさんくさく思われたのかもしれない、つまりわたしが、女が男に期待しているような、あとですぐボロのでるいい加減なふるまいをしなかったという、まさにそのことのために。だがいかに彼女でも、いま彼女のきいたその熱病でほんとうにわたしは変ってしまったのであって、わたしがこんなふうに、ともかくわけもわからぬ帰国をしたのも、また以前の性格に反するこんな手記を書き始めることになったのも、みな熱病のせい、そう、熱病でひとが変ってしまったというよりほかに理由が考えられないということまで、知っていただろうか。わたし自身だって、いっしょに車にのって事務所にむかっているときには、まだそれらのことに気づいていなかったのだ。わたしでさえいろんなことがとつぜん明らかになったのは、それからしばらくのち、警察の調書を読んだときなのだ。

しかし、ひょっとしたら義母はそんな意味でいったのではないかもしれない。なぜといって、ヴィーゼナー夫人までがあえて会話にわりこんできたのだから。「ええ、ほんとうにそうでございますわ」と彼女はいった、「ゲルトの部屋にある昔のお写真で存じあげているだけのわたくしにさえ、すぐあなたがわかりましたもの。ゲルトもそういっています。そうね、ゲルト？」

「だとしたらゲルトはたいへん礼儀を心得ているわけです。あなたは彼をりっぱに教育してくださいましたね、ヴィーゼナー夫人。」

「でも、すぐあなたにもここがすっかり変ってしまったこ

とがわかりますよ」と義母がいった。
「ご自分の生まれた町がほとんどわからないくらいでしょうね」とヴィーゼナー夫人が意見をのべた。「おつらいことだとお察しいたしますわ。」
「ぼくの生まれた町ですって？　ぼくはイェーナの生まれですよ」とわたしは答えた。
「まあ、それじゃあなたも東地区の方ですの」とヴィーゼナー夫人は、同郷人にでも出会ったみたいに喜んで叫んだ。
「そんなことはぜんぜん存じませんでしたわ。」
「そんなことにもすぐ慣れます」と義母が会話をうちきった。「だれだってそうなんですから。二、三日もすればもう壊れた跡なんかまるで目に入らなくなります。それに一番ひどい所はもうすっかり片づけられて、どんどん建て直されていますからね。初めはいまよりそりゃずっとひどいようすでしたよ。あのころわたしたちはユーバーリンゲンにいたのよ。知ってるわね、ボーデン湖畔のちっちゃな小ぎれいな町。ゲルトにはそのほうがよかったのでね。」
　それから車がとまった。運転手がまたとびおりて、さっとドアをあけた。
「二、三日うちにぼくにさいてくださるお暇があったら、ママ」とわたしは別れの挨拶として彼女にいった、「いっしょにスザンヌの墓までいってくださいませんか。万事あなたのお指図どおりにします。」
「いいですとも、シュテファン、きっとね。じゃ、ごきげんよう。」
　ボタンに社章の刻印されている緑色の制服をきたエレベーター・ボーイが、社長の部屋のある三階までわれわれを運んだ。わたしにはすべてが昔と同じように見えた。昔と同じ書物机、それも昔と同じ場所に。それからビロード地の同じ緑色のカーテン。一方の隅の喫煙用テーブルには、青銅の鹿のついた昔と同じ巨大な灰皿さえのっていた。これはいつもわたしにはひどく危ない防禦用武器のような気がしていたものだが、どうやらだれもこれを自分の身を守るために必要としなかったらしい。鹿の角さえ曲っていなかったから。
　まるで古い映画でもそこにうつっているようなものだったが、ここの連中はそれをみな大まじめでやっているのだった。「あなた方のところではなんにも壊されなかったんですか？」とわたしはきいた。
　まあなにも壊されなかったようなものだな、と義父は説明した。むろん窓ガラスは壊れた、それに二、三のこまごましたものも。いやこの建物の右翼には焼夷弾さえ二つ三つ屋根を破って落ちてきたのだが、すぐ消しとめることができた。うちでは万事が非常によく組織されていたからだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.